

2023年 小教区評議会役員研修会 報告書

2023年7月18日
文責：福音宣教企画室

2023年6月24日(土) 14:00～15:30 オンライン開催(zoom)

「滞日外国人から学ぶ」サイクルテーマ③ 社会への福音宣教

参加端末数 68【役員：56 司祭司牧者：10 スタッフ：2 (以上概数)】

始めの祈り

大塚司教導入

役員のリダーシップのおかげで、小教区評議会の規約の運用ができ、毎年新役員として奉仕してくださる方が一定数あることを嬉しく思う。

役員研修会・交流会と、サイクルテーマについて

春は研修会で主に聴くこと、学びを目的に、秋の交流会では交流と分かち合いを目的にしている。テーマは3年サイクルで ①教会と福音宣教の理解 ②共同体づくり ③社会への福音宣教 を取り上げている。

今年のサイクルテーマは、社会へ福音宣教する教会共同体の役員が、小教区の短・長期計画、ブロックでの活動を計画する時に強く念頭に置けるように設けている。今年は特に、外国籍信徒が、カトリック信者がほとんどいない日本社会で暮らし、色々な困難もありながら、日常生活でどのように福音宣教し、信仰生活を送っているのかを、司牧担当者から学び、日本人信徒が共同体の外国籍信徒と共に、キリスト教の日本社会での位置づけ、足りないところを学び合いたい。

シノドスの歩みを続けながら、私たちが教会の外の人々とともに歩み、社会に福音宣教する切り口として取り組んでいけることと思う。

座談会 司会：Sr.山本 アシスタント：Fr.一場

●パネラー紹介

グエン・バン・ナン神父(クラレチアン宣教会：ベトナム出身)【洛東ブロック担当司祭】

京都教区内の700人以上のベトナム人信徒と関わる。

大和高田、草津、亀岡、福知山、伏見(300人)の5つの共同体がある。

Sr.信田祐子(無原罪の聖母フランシスコ姉妹会：東京出身)【フィリピン人司牧担当】

主に京都北部担当。南部地区では河原町教会での英語ミサの奉仕。

ブルーノ・ロハス神父(京都教区司祭：ペルー出身)【三重北部ブロック担当司祭】

ラテンアメリカ(ブラジル・スペイン語圏)の共同体と司牧。

三重以外に滋賀にも共同体がある(久居、四日市、鈴鹿、草津、彦根、水口)。

鶴山進栄神父(京都教区司祭：長崎出身) 【三重南部ブロック担当司祭(主に松阪・伊勢)】

伊勢にはベトナム人、フィリピン人信徒、松阪にはフィリピン人の大きな共同体。

ホセ・アルフレド・ゴンザレス神父(グアダルペ宣教修道会：メキシコ出身) 【三重南部ブロック担当司祭(主に上野・名張)】

上野にベトナム、ブラジル、フィリピン、ペルー、日本人信徒の5つの共同体。

名張で英語ミサ(フィリピン人信徒40名~70名)。

●知ってもらいたい活動

ホセ・A. ゴンザレス神父(三重南部ブロック担当)

名張教会 外国籍信徒のための外国語ミサに加え、フィリピン、ベトナム、インドネシア、日本の代表者に、主に典礼聖歌について協力してもらい、国際ミサをしている。きっかけは言語別のミサではフィリピン人信徒との交流がなかったためだが、国際ミサをすることでフィリピン人信徒が多く参加するようになった。

上野教会 上野教会の5つの共同体のために各言語でミサを行なう。多国籍の信徒がおり、それぞれの共同体の活動は大切である。両親は外国籍でも日本で生まれた子供は日本語が話せる。多文化であり、カテケージスや勉強会、交流はできるだけ多言語でするようにしている。多言語で行なうミサ、日本語を主体に、朗読、聖歌、共同祈願を他言語で行なうミサにも取り組んでいる。将来は主日のミサを一回でも国際ミサにできるようにしたい。

インター・カルチュラルな共同体 各国語でミサができる司祭は限られており、将来はわからない。京都教区だけでなく、日本の教会の将来のためにもできるだけそれぞれの国籍の人が一緒にミサをささげることが大切と考えている。それぞれの共同体を大事にしながら、共同体全体のことを考え、たくさんの共同体があるマルチカルチュラルな教会から、共同体どうしが交流する「インター・カルチュラル」な共同体にしたい。それができれば京都教区は成長することができ、多言語で話していた初代教会のようになる。現在日本の教会はそのような状態になりつつあり、その豊かさを大事にしたい。

R. ブルーノ神父(三重北部ブロック担当)

ラテンアメリカ(ポルトガル語圏とスペイン語圏)共同体 教育・養成の必要

三重県に2つ、滋賀県に4つのペルー人、ブラジル人信徒の共同体がある。秘跡以外の司牧活動でリーダーの教育、研修が必要である。リーダー、役員に集まってもらい、司教年頭書簡、シノドス、典礼、教育など色々なテーマで勉強しているが、カテキスタの養成が急務である。日本人信徒にはカテキスタのプログラムがあるが、ラテンアメリカのカテキスタは新しいルールで勉強しなければならない。1年位でラテンアメリカのリーダーたちでカテキスタをしたい人が勉強できるようにしたい。プロジェクトの準備はできている。

小教区内で安定して粘り強い核となるリーダーを育成し、彼らを中心として自国の言語でコミュニティを構築することで、小教区と深くかかわるようになることが分かった。私のフォーカスは秘跡以外では、信徒の養成である。京都教区の教会の未来を考え、中心グループの周りに共同体を立てる。ビジョンが大切。滞日外国人が日本に学ぶことについては、他宗教の信徒との対話などチャンスはあるが今はない。

グエン・バン・ナン神父(洛東ブロック担当)

京都で700人(伏見で300人)。奈良、滋賀、京都に5つの共同体がある。ブロックを越えてベトナム語ミサを行っている。大阪教区のベトナム人シスターに結婚講座、入門講座を助けてもらっている。ベトナム人信徒は日本に来て働いている若い人が多く、教会活動がないとミサに来ない人も多いので、特別な意向のためロザリオ、グループでオンラインでの祈りなど色々な活動をしている。ベトナム人はミサや赦しの秘跡に熱心なので、ミサの前後に1時間赦しの秘跡の時間を作っている。

●外国籍信徒の生き生きした信仰のエネルギーの源

鶴山進栄神父(三重南部ブロック担当)

今回の座談会にあたり松阪のフィリピン人共同体の方にアンケートをとった。「信仰を持っていて良かったことは何か」という質問では、「ミサに行くのは当然」、「神に従順でありたい」、「感謝したいから」、という回答があった。また、「ミサにどうしても行きたい」、という回答からは、信仰の渴きがあることがわかる。

「信仰を持っていて良かったことは何ですか」という質問の回答は、「苦境に立たされた時、神が共にいてくださることを信じられる」、「神は私達と共にいて決して離れないと信じることができる」、「信仰は心の中にある。自分の内に信仰がなければ私たちは混沌の中にある。他者を信頼しなければ、自由な人間として生きることができない」、「信仰は私たちの魂の渴きを癒す水のようなもの」。信仰は自分の中に閉じこもるのではなく、他人を信頼することにつながり、自分の生き方を整えてくれるものということだと思ふ。仕事帰りに教会に立ち寄り祈ったり、日曜日にミサに来られない時、時間を作って教会に来てロザリオをする在日外国人信徒の方々を見ていると、彼らが素朴な思いで日々の生活を、マリア様を通して、そしてイエス様、神様に直接委ねているのがわかる。

シスター信田祐子(フィリピン人司牧担当)

日本にいる外国人は大きく二つのグループに分けられる。特定技能実習生など一定の期間を日本で過ごして期間が終われば基本的に国に帰る人たちと、結婚や定住という形で期間を限らずの日本で生活している人たちだ。特定技能実習生など仕事のために来ている人は日曜日に教会に来ることが難しい人も多い。日本で生活する人たちも家族で自分だけが信者の場合、教会に定期的に行かれないという現実がある。子供の頃から教会に行くのは当たり前なのは事実で、右を向いても左を向いても教会があり、クリスマスは国の祝日という国の人たちは、カトリックが社会の中で見えない私たちとは若干感覚として信仰の持ち方というのは違うのではないか。

このように社会のあり方が自国と根本的に違うなかでも、日本で生活している外国籍信徒は宣教をしている。彼らは堂々と「教会に行きたいから日曜日にお休みをしたい」と会社に言い、信徒でない従業員にも「神父様に会うから早く仕事を終えて帰ります」とか「今日は教会にお祈りの集まりがあるから仕事は失礼します」と胸を張って言う。これは日本人にはなかなかできないこと。信仰をもっているということを発言できることは彼らの強みであり、そこから学ぶことは多くある。

教会共同体について一言付け加えると、フィリピン人はミサの5分前に教会に来ることができないと言われことがあるが、国への仕送りのために本当に長時間働いている人たちや、いわゆる夜の商売で夜遅くまで働いている人たちは日曜日のミサに来るために大きな犠牲を払っている。また技能実習生達は教会に行くために日曜日に仕事休むことが叶えられることは少ない。彼らの生活の背

景にあるものを私たち日本人の信徒が理解し、偏見ではなくて温かい心を持って声を掛け合うということが、まず私たち日本人にできる宣教ではないかと思う。

●日本社会に伝えたいこと

ホセ・A. ゴンザレス神父

町内会への参加、ミサに行くための会議時間変更の依頼、祈りの集いのために集会所を借りる、など、地域社会との関わりがある。

名張教会の関わりとしては、他宗教対話のための各宗教リーダーとの研修に日本人信徒が参加し、教会にフィードバックしているが、外国籍信徒は参加していない。しかし、ベトナム、フィリピンの信徒は働いている会社の中で信者を探し、声を掛け、教会を紹介する。また会社の人を教会に招き、どこで祈っているか、なぜ祈るために仕事を休むのか理解してもらい繋がりを作っている。昨年始まった初金のミサではミサ中献金を貧しい子供のために送っている。ミサだけでなく、社会問題にも答えようとする繋がりが必要。

上野教会の外国籍信徒は多くが社会とかかわっている。日本人と結婚した人は日々の家庭生活中、市役所勤務、大学教員など実際に日本社会にあって教会の役員もしている人、グループや個人で貧しい人、ホームレス支援、配食活動している人など、多くの福音宣教のチャレンジをしている。介護施設で働いている人は、利用者に「私はカトリックです。安心してください。あなたのために神に祈っています」と伝えている。

これらの源になっているのが、教会での祈り、聖書講座、カテキズム、多国籍夫婦のための夫婦講座などの勉強会や養成講座である。

私も他の司祭がたと同様、明日の福音にある「人々の前で彼らが私の仲間であると言い表し」、神父として彼らがプライドを持って福音宣教できるように支えたい。

シスター信田祐子

ホセ神父の言うインター・カルチュラル コミュニティを作っていくということは本当に大切なこと。私たちは日本語のミサとか〇〇語のミサを作っているのではなくて、教会共同体を作っているのだから、国籍を問わず、日本という地にあるカトリック教会というものを一つの共同体として作っていくことがこれからの一番大きな課題ではないかと思う。

●是非これだけは伝えておきたいこと

グエン・バン・ナン神父

ホセ神父と Sr.信田の分かち合いの通り、信者ではない人をミサや教会活動に誘うことはとても大切。技能実習生がミサのために仕事を休むことに対して会社はとても厳しいが、社長たちを教会に誘い、一緒に飲んだり食べたりすると、理解してくれるようになる。ベトナム人はこのようによく人を招く。また社会活動として、ホームレスの方々への支援活動も行っている。

三つの伝えたいこと

- 1.日本の信者は洗礼を受ける年齢が高いため、カテキズムや典礼、教会について深く理解することが難しいように思う。だから（司牧者は）説教や勉強会、レジオマリエを通して、カテキズムと典礼を深く説明し、信徒も学んでほしい。

- 2.司祭と信徒がかかわりを深めること。神父も信徒もミサだけでなく、家族のようにかかわりを深めたほうがよい。
- 3.日本の文化では招くことをあまりしないが、ぜひ家族を教会に招いてほしい。

★質疑応答★

要望

聖週間など特別な主日の朗読箇所や共同祈願を、教区で統一してそれぞれの言語に翻訳し、ホームページに掲載、教会に送付してもらえると助かる。また日々の聖歌も、スペイン語やベトナム語の楽譜などを用意していただけると助かる。

Q. 日本語ミサに参加する外国籍信徒のために、何か助けになることがあれば教えて欲しい。

A. ホセ神父

まず、外国籍信徒とのつながりが大切。つながりができればミサ奉仕、朗読や共同祈願を母国語でもしてもらうなど、特別なことでなく、毎週行っているミサの中で何かできればいいと思う。

Q. 職場のベトナムの方に教会に来ていただけたらいいなと思う。どういってお声掛けが喜んでもらえるか教えていただきたい。

A. ナン神父

祖国を離れ、日本語も分からず、寂しく感じていると思うので、教会の場所を教えて、一緒に行くのが一番よいと思う。温かく招待したら必ず来ます。

大塚司教コメント

パネラーの司牧者の皆さん、貴重な意見をありがとうございました。役員の皆さんは、ご自分の教会のことを想像しながら聴いておられたと思うが、5人の司牧者がそれぞれの観点で話されたので、まだ整理がつかない、混乱されているかもしれない。発言者が何を言っているのか耳を澄まして聴くことは、学びの気持ちの表れである。シノドスは聴き合うこと。聴く方も語る方も、自分の教会で何かヒントになることをゆっくり整理していただきたい。

日本人は信仰が生活や社会の中で遊離しやすい。結びつかない。これは日本の教会の大きな特徴であると思う。私たちは宣教に送り出されながら「私なんか…」という思いが出てくる。しかし信仰を表明するのは環境ではなく、神の力を信じること。宣教を助けてくださる神の力を信じましょう。神のことを語ろうとしている人間を神が助けないはずはない。まずは外国籍の方のように自分の信仰を表明し、自由に語ってもよいのではないか。

ブルーノ神父さまの言われた信徒のリーダーの育成については、大切なことでもう少し聴きたいと思った点である。リーダー養成とは「リーダーシップ」そのものの養成ではなく、日本の社会で信仰を生きていくために、外国の方は日本の社会や教会でどのようなことが宣教に関係するのかを学ぶという意味でのリーダー研修であると思う。また、諸宗教対話については、外国籍信徒、日本人信徒双方が、他の宗教の方と日本社会で一緒に生きていくための特別な心構えや勉強が必要であると思う。その意味で、リー

ダー研修として日本社会の人権問題、結婚や夫婦の問題、人間関係について学ぶ、ということは、日本社会で生きていくための試みとして大事ではないかと思う。

ホセ神父さまのマルチカルチュラル(多文化共生)から、インターカルチュラル(多文化交流)へ、ということに関して、例えば上野教会の子どもたちはほとんどが日本語を話し、教会で外国籍の友達と一緒に活動しているわけで、グローバルな社会で多言語、多文化の人たちと一緒に生きていく、ということを教会が養成できている、学びの場となっている。これは大きな特徴であり、有意義なことであると思う。一般社会に出れば多国籍の方と学び合う経験は少ない。その意味で、子どもたちが教会で、多文化共生の中で信仰を通して学ぶことは貴重である。外国籍信徒の皆さんの生きざま、信仰表明から学び、共同体で活かせることを役員同士、また、司祭団と共に考えていただきたい。

【役員のかわりより】

- ・京都教区の各教会における外国籍信徒のコミュニティの規模と、各教会の取り組み、外国籍司祭の取り組みたい課題、外国籍信徒の信仰について学べた。
- ・相手が何者であっても信仰表明をする真摯さに見習いたい。
- ・教会は、日本社会の中でも多様な文化と交わることができる特性を持つことが強みになる。
- ・心地よい「住み分け」にとどまりがちだが、一時的に心地悪くても「共に」を模索できる方がもっと良いのだろう(でもエネルギーが必要なのだろう)。
- ・聖職者、奉献生活者、信徒が協働するために、素地となる日常的な交わりが不足している。わずかでもこれまでとは違う、新たな気持ちで元気を引き出せるようになりたい。
- ・なかなか組織立った取り組みにならないことが残念。個人任せにすることが多く、任せられた外国籍信徒も負担。日本人信徒の働きかけが弱く感じる。

以上。